日本スポーツ社会学会会報

Vol. 30

Sport Sociology

【目　次】

・日本スポーツ社会学会第11回大会のご案内……1
・特集：1st World Congress of Sociology of Sport ……5
スポーツ社会学の世界的潮流と日本の位置……5
コリアン・ホスピタリティで盛り上がった大会……7
・エリック・ダニング講演……9
・研究委員会からのお知らせ……12
・編集委員会からのお知らせ……14
・国際交流委員会からのお知らせ…16
・理事会報告……18
・会員動向……20
・編集後記・事務局住所……24

日本スポーツ社会学会
Japan Society of Sport Sociology
事務局　立命館大学　　2001年11月

叢書・身体と文化1 16341
技術としての身体
●野村雅一・市川　雅　編著
身体は文化的に形成された一つのしかけである。人間の感覚そのものから身体技術のさまざまな断面とそれらの社会的・文化的な意味を検証する。　●456頁　本体4,000円

叢書・身体と文化2 16342
コミュニケーションとして身体
●菅原和孝・野村雅一　編著
身体の原初的な能力から社会・文化的脈絡の中で帯びる儀礼性・象徴性に至るまで、コミュニケーションとしての身体の多彩な働きを描きだす。
●456頁　本体4,000円

叢書・身体と文化3
表象としての身体
A5判
鷲田清一・野村雅一　編著
身体は何が第一次的な機能かわからないほど豊かな意味の世界を持っている。身体が多様な文化の中で、どう解釈・表現されているかを考える。
続刊　16343

ゼミナール　現代日本の
スポーツビジネス戦略
●上西康文 編　●A5判・240頁 本体2,400円
新たなビジネスチャンス創造のための21世紀型スポーツマーケティング戦略とは？

スポーツ経営学
●山下秋二・畑　攻・冨田幸博　編
●A5判・380頁　本体2,800円
スポーツ経営学を体系化し、実務者はもちろん初学者にもわかりやすく解説。

民族遊戯大事典 01260
●大林太良・岸野雄三・寒川恒夫・山下晋司　編集
文化人類学・スポーツ人類学の新進・ベテラン執筆陣95名の力作納め、多数の貴重な写真を駆使した、見て、読んで、楽しい事典。
●菊判・800頁　本体9,800円

図説 スポーツの歴史 26352
《世界スポーツ史》へのアプローチ
●稲垣正浩・野々宮徹・寒川恒夫・谷釜了正　著
人間にとってスポーツとは何か。歴史的視点からその「現在」と「世界性」を問う。オールカラー
●B4変型判・264頁　本体18,000円

体育学講義シリーズ 26140
スポーツ社会学講義
●森川貞夫・佐伯聰夫 編著　●菊判・296頁 本体19,00円

現代社会とスポーツ 26203
●P・C・マッキントッシュ 著　●寺島善一・岡尾恵市・森川貞夫 編訳
●A5判・240頁　本体1,748円

スポーツ産業論 26332
●松田義幸　著　●A5判・282頁　本体2,300円

スポーツ倫理を問う
●友添秀則・近藤良享　著
●四六判・256頁　本体1,800円
日本のスポーツ界に噴出する問題を、倫理的視点からどう考えるかの指針を示す。

スポーツ・ヒーローと性犯罪
●ジェフ・ベネディクト　著
●山田ゆかり　訳
●四六判・338頁 本体2,200円
英雄たちは、なぜ許されぬ罪を犯したのか。

大修館書店　〒101-8466　東京都千代田区神田錦町3-24 [出版情報] http://www.taishukan.co.jp

FAX注文書　▼書店にない場合やお急ぎの方は、この注文書にご記入のうえ、下記宛先へFAXまたは郵送にてお送りください。ご注文から一週間以内でお届けします。（一般の書店ではご利用になれません）

	冊	円
	冊	円
	冊	円
	冊	円
	冊	円
	冊	円

ご芳名　ふりがな
ご住所　都道府県
電話番号　（　　）

■お支払い方法（番号に○をお付け下さい）
1.クレジットカードご利用(送料＝310円)　2.代金着払い(送料＝380円)
▼クレジットカードご利用の方は必ずご記入下さい。
クレジットカード名(番号に○をお付け下さい)
1 JCB　2 UC　3 VISA　4 Master
すべてのJCBカードならびにDC・MCなどすべてのVISA・Masterカードがご利用いただけます。
カード番号
カード有効期限　年　月
お支払い方法（○をお付け下さい）　1回　2回　リボルビング
ご署名

FAX 03-5999-5435
TESクラブ大修館書店注文センター
〒176-0011 東京都練馬区豊玉上2-4-8
電話03-5999-5434

日本スポーツ社会学会第11回大会のご案内

Ⅰ．大会概要

期　日　2002年３月28日(木)・29日(金)

会　場　九州大学六本松キャンパス　　福岡市中央区六本松4-2-1

アクセス方法

空　　路：福岡空港→(地下鉄１号線)→ＪＲ博多駅下車(あとは次のＪＲと同じ)
Ｊ　　Ｒ：ＪＲ博多駅→西鉄バス→六本松停留所
西　　鉄：西鉄福岡駅→西鉄バス→六本松停留所
高速バス：ＪＲ博多駅下車（あとはＪＲの場合と同じ）
　　西鉄福岡駅下車（あとは西鉄の場合と同じ）

＊詳しくは、〈http://www.kyushu-u.ac.jp/info/access-j.html〉をご覧ください。

＊大会事務局は、交通や宿泊に関する斡旋は行いません。各自で手配ください。

参加費　正 会 員：5,000円
　　学生会員：3,000円
　　懇親会費：3,000円（正会員・学生会員とも）

＊同封の振替用紙によりご送金ください。事前振り込みによらない場合、正会員の大会参加費は6,000円となります。

大会実行委員会事務局
九州大学健康科学センター内
Phone／Fax：092-583-7855　　e-mail：yamamoto@ihs.kyushu-u.ac.jp

スケジュール

	11：00	12：00	13：00	15：00	17：00	18：00	20：00
3月28日(木)	理事会	受付	一般発表	公開フォーラム	総会	懇親会	

	9：00	11：30	12：30	14：00	16：00
29日(金)	一般発表	特別講演	昼食	テーマセッション	

＊「公開フォーラム」は大会実行委員会の企画です。「都市生活とスポーツ・イベントの未来－福岡からの発信－」（仮題）といった演題で、内容の検討を行っています。なお、スケジュールは、都合により変更となる場合があります。あらかじめご了承ください。

Ⅱ．大会参加・一般研究発表の申し込み

大会に参加される方、一般発表をされる方は、以下の手続きに従って申し込みを行ってください。

申し込み手続き

・綴じ込みの「日本スポーツ社会学会第11回大会参加・発表申込書」に必要事項を記入し、大会実行委員会事務局宛郵送するか、同一の内容を電子メールにて送信してください。

＊電子メールによる場合、着信確認のメールを事務局より送信します。確認メールが届かない場合は、ご連絡ください。

・申込書の発送と同時に、郵便振替にて参加費等を振込先口座宛ご送金ください。
参加費は、正会員が5,000円、学生会員が3,000円、懇親会費は3,000円です。

申し込み締め切り

2001年12月20日(木)

Ⅲ．発表抄録集原稿の提出

一般発表をされる方は、抄録集に掲載するための原稿を以下の要領で作成し、期日までに大会実行委員会事務局宛発送してください。

書　式

・Ａ４版用紙２枚、横書きとします。１ページあたり40字×50行の2,000字（論題、発表者氏名、所属を含む）で、上下左右の余白を15㎜以上とってください。

＊論題、発表者氏名、所属を原稿の冒頭に入れてください。また、それぞれ日本語表記の下に英語表記を入れてください。

発送の仕方

・ワープロソフト等を使用して原稿を作成し、プリントアウトしたものを、折り目や汚れがつかないように厚紙等で保護して郵送してください。

・電子メールによる場合は、MS Wordで作成した書類をメールに添付して送信してください。

＊いずれの場合も、事務局では編集を行いません。また、電子メールでの発送には、着信確認のメールを事務局より送信します。確認メールが届かない場合は、ご連絡ください。

原稿提出締め切り

2002年２月６日(水)

＊期日までに提出がない場合は、抄録集に掲載できません。ご注意ください。

Ⅳ．発表に関する注意事項

①個人研究の発表は、原則として日本スポーツ社会学会の会員に限ります。

②研究発表の持ち時間は、今のところ質疑応答を含めて30分としていますが、発表者数によって変更することもあります。

③発表に、ＰＣプロジェクター、スライド映写機、OHP、VTR等の機器を使用される方は、「申込書」または電子メールによりお知らせください。

④当日、発表資料を配付される方は、各自で70部以上を持参してください。

「日本スポーツ社会学会第11回大会参加・発表申込書」送付先

〒816-8580　春日市春日公園６－１
九州大学健康科学センター内
日本スポーツ社会学会第11回大会実行委員会事務局　宛
Phone/Fax：092-583-7855　e-mail：yamamoto@ihs.kyushu-u.ac.jp

参加費等振込先

郵便振替口座　番　　号　０１７９０－１－２９８５３
口座名称　山本　教人

＊同封の振替用紙をご利用ください（手数料は各自ご負担願います）。
支払い者の連絡先等を必ずご記入ください。

日本スポーツ社会学会第11回大会
参加・発表申込書

フリガナ 氏　　名	

会員の種別	・正会員	・学生会員
懇　親　会	・参加する	・参加しない
一般研究発表	・する	・しない
論　　題 ＊一般研究発表者のみ記入		
発表に必要な機器	・PCプロジェクター　・スライド映写機　・OHP　・VTR	

所属(勤務)先
所属(勤務)先住所　〒 Phone：　　Fax：
自宅住所　〒 Phone：　　Fax：
e-mail：
その他連絡事項等

特集：1st World Congress of Sociology of Sport

平井　肇（滋賀大学）

2001年7月20日から23日までの4日間、韓国・ソウルで1st World Congress of Sociology of Sportが開催された。世界各国からスポーツ社会学者が一堂に会し、スポーツの社会・文化的問題や現象に係わってシンポジウムや報告がなされた。情報交換や議論がなされる姿が会場のあちこちで見られ、また公式のプログラムが終了後は、揃って街に繰り出しいっそうの交流を深めた人も多数いたようだ。

私も参加したが、韓国スポーツ社会学会の方々の大会を成功させようとする熱意と努力には本当に感心した。韓国の方々は実にチームワークが良くて、人をもてなす術を知っておられ、またこの種の大会を運営するノウハウを持っておられると感じた。ここでは、大会に参加された二名の方に大会の「雰囲気」を皆さんに伝えていただきたく、レポートをお願いした。

スポーツ社会学の世界的潮流と日本の位置

菊　幸一（奈良女子大学）

キーノート4編、シンポジウム3編、サブ・キーノートを含めた口頭発表118編、ポスター発表19編、計144編が、実際の発表の有無は別にしてプログラムに掲載されている全ての発表数である。2001年7月20日から23日までの4日間にこれだけの数のスポーツ社会学に関する発表が、韓国ソウルの地に世界の研究者を一堂に会して開催されたことは、それ自体がたいへん興味深い出来事と言えよう。また、そうであるだけに、内容的には現在のスポーツ社会学の世界的な潮流の一端を垣間みることができ、わが国の研究状況を位置づけるよい機会でもあったように思われる。

会議のメイン・テーマである「スポーツ社会学と新たなグローバル秩序：パースペクティヴの架橋と境界の越境」は、グローバル化する世界情勢の中でスポーツ社会学における知的生産をよりグローバル化するために、各国の多様化する研究の現状を越境し、その視点を交錯させることを意図したものと言えよう。キーノート・スピーチは、この国際会議のメイン・テーマと同タイトルで、わが国でもおなじみのJ.W.Loyによって行われた。彼は、彼の得意とするスポーツの社会的次元に関する機能的分類を駆使して、社会過程におけるスポーツ現象の特徴やグローバリゼーションの形態を整理し、ポスト・モダンのスポーツの基盤を市民社会に置いて、それへの全幅の信頼と貢献の上に個人的あるいはプロフェッショナルなレベルにおけるスポーツ・ボランタリズムの重要性を説いた。しかし、そ

の後に起きた米国の同時多発テロの経験を踏まえて、このポスト・モダンの可能性と限界を考えてみると、機能的分析が前提としている「市民社会」とそれによって形成される規範、秩序の可能性と限界を相対化する視点こそが、「新たなグローバル秩序」を世界的視野で交錯させることの意味ではないかということに気づかせられる。そのように考えると、世界共通の言語となっている「スポーツ」それ自体の社会学的研究とその原初的形態であるプレイ（遊び）やゲームの世界「から」再度「市民社会」の秩序を相対的に問い返す視点が、それこそグローバルな水準のスポーツ社会学にますます求められているように思われる。その意味で、市民の社会的秩序の最も対極にあるスポーツと暴力の問題を長年研究してきたE.Dunningが、“The Globalization of Sport and Sociology: Reflections on the Current State of Play”と題して、セッションのキーノート・スピーチを行ったことは非常に興味深いものがあった。

また、主催者側による口頭発表のサブ・テーマは、大きく４つに区分され、それぞれに以下のようなテーマ設定が行われていた（カッコ内の数字はプログラム記載の発表数）。

Ⅰ―１．スポーツと情報化時代(4)
　―２．スポーツとグローバルな不平等(5)
　―３．スポーツとグローバルな政治(8)
　―４．スポーツ、レジャー、レクリエーションに関する文化産業(8)
　―５．グローバルなスポーツ文化の再生産と消費（15）
Ⅱ―１．スポーツ社会学と新たなグローバル秩序：誰のための、何のための知識か？(4)
　―２．スポーツ・フォー・オール：パースペクティヴ、挑戦、可能性(9)
　―３．スポーツと社会変化、社会発展(9)
Ⅲ―１．スポーツとナショナリズム、国民国家(6)
　―２．スポーツとアイデンティティ・ポリティクス(4)
　―３．スポーツ、ジェンダー、セクシャリティ(5)
Ⅳ―１．アジアにおけるスポーツ社会学(10)
　―２．スポーツと政治(10)
　―３．スポーツとレジャー、クオリティ・オブ・ライフ(11)
　―４．スポーツと社会化、社会的相互作用(10)

しかし、実際の発表内容と上記の分類とは必ずしも一致しておらず、主催者側の苦心の後がみられるが、方法的には従来の統計的調査に加えて理論的研究や事例的研究も多くみられ、それぞれにフロアーの関心を引いていたようである。知的交流という面からみれば、次代のヨーロッパのスポーツ社会学を背負うとみられるブライトン大学のJ.Sugdenやラフバラ大学のK.Youngなど発表には、かなり理論的には難しい内容であったにもかかわらず聴衆が多く集まっていた。わが国の研究者もゲスト・スピーカーの野川春夫、山口泰雄、清水諭の各氏が、堂々と流暢な英語で発表をこなし、その他の一般発表やポスター発表においても10名を超える中堅・若手研究者が発表を行った。中には、これまで比較的英語で

伝えることが難しいと思われる理論的な内容にも果敢にチャレンジする発表がみられ、ようやく国際的なレベルでの理論的な擦り合わせがストレートに可能な場が形成されてきたように思われる。しかしその反面、例えばⅣ―３、Ⅳ―４のセッションでは、すべての発表者が韓国人研究者であり、フロアーには自国の研究者以外ほとんど散見されない状況もみられた。ホスト国に対する参加者のホスピタリティのあり方を含め、国際的なレベルにおけるアジアからの知的交流や発信の難しさも如実に感じざるを得ない一コマであった。

コリアン・ホスピタリティで盛り上がった大会

天野郡壽（神戸大学）

第１回世界スポーツ社会学会（1st World Congress of Sociology of Sport）は、ソウル市内観光から始まった。午前中に到着した約30名の参加者は参加登録もそこそこに市内観光のバスに乗り込む。学会事務局から２人、説明役としてソウル大学で政治学を学んでいると言う学生が２人、計４人のうら若き女性の先導で、景昌宮を日本、中国、イラン、オーストラリア人がぞろぞろついて歩く。こんな人種の混ざり合った団体はかなり珍しいようで周囲から興味深げに眺められてしまった。国立博物館、ナムソンタワーをまわり、宿舎兼発表会場である延世大学SANGNAMGHゲストハウスに帰着する。

今回の宿泊は２箇所。この延世大学と隣接の梨花女子大ゲストハウスがあてられている。隣といっても両大学とも広大なキャンパスを持っていて、宿舎間は歩いて30分もかかり、しかもそこはかなりの坂道。しかし学会専用の送迎バスを準備ているので、大助かりだ。

５時からレセプション開始。会場は延世大学同窓会会館ホール。ここは卒業パーティーなどが行われる場所のようだ。体育館ほどの広さでステージもついている。学会会長金女史、国際学会会長マクガイヤーの挨拶に続き、Ｊ・ロイの記念講演がある。その後、こどものカンフー実演、韓国式気功体操、韓国舞踊で楽しませてもらい、乾杯となる。司会者から「外国からの参加者がかくも多くかつ盛大なる学会は非常に少ない。絶対に成功させたい」との気合のこもったメッセージがおくられた。ブッフェもきれいに盛られ、量も味も充分。あちこちに歓談の輪ができた。盛り上がった歓迎会も、送迎バスが出るとのアナウンスをきっかけに、８時過ぎにお開きとなる。

第２日目からは研究発表が始まる。会場は１階に一部屋、二階に２部屋の、計３箇所。すべての部屋には２枚のスクリーンが自動で上下する装置があり、パワーポイント専用プロジェクターが備えられている。いずれも50　60人ほど収容できる階段教室であるが、椅子や机はかなり豪華で、国際会議用に作られた部屋と思える。

発表の内容によるのだろうか、部屋によって聴衆の数が違う。一方は30人以上もいるのに、他方は10人に満たないこともあった。それに発表者のキャンセルがあり、いずれの会

場もスケジュールが前倒しになって、プログラムの時間に行くとすでに終わっていたりもした。国際学会にはありがちだが、それにしても主催者、進行係泣かせで、何よりも発表者には、少々気の毒な情況であった。参加者は延べ300人、そのうち100人ぐらいが外国人とのこと。大会委員長金先生主催の夕食会が開かれ50人ほどが参加した。

次の日も会場の人の数は減らない。カウンターにコーヒー、紅茶、トマトとスモモが出され、気配りが行き届いている。期間中の昼食は３日とも発表会場でサービスされ、初日、３日目は韓国料理、中日はハンバーグとメニューにも工夫がある。

２日目の夕方、韓国と日本の参加者の発案による日韓交流会が持たれた。焼肉屋に日韓の教師と学生60人ほどが参加の大焼肉パーティーとなる。会もたけなわ、学会事務局長の朴先生が立ち上がり、伝票を片手に「(韓国スポーツ社会学会会長の）金ソウル大教授から金一封をいただいている」との宣言があり、会場はさらに盛り上がった。８時になり、参加者の半分は後ろ髪を惹かれる思いで、学会主催のハン河クルージングに移動。残った日韓のメンバーは２次会、３次会と繰り出したとのことである。

ハン河クルーズの参加者は50名ほど。あいにくの雨でデッキに出られなかったが、それが幸いして、船内のあちこちに会話の環ができる。ハンガリーからのメンバーは全く知らない韓国人グループに近づいてビールをもらっている。どうやら学会の世話人と勘違いしたらしい。引率役の実行委員長朴先生曰く、「韓国では同席の人に飲み物をあげたりするのは日常のこと。気にすることはありません」。メンバー以外の人々とも友好を深め、激しい雨の中、市内のホテルに泊まっている人を送りながら、２台のバスで12時帰舎。

この学会は最終日になっても、聴衆の数は減らない。歓迎会の力強い挨拶に応えようとするのか、日々の手厚いホストぶりに報いるためか、減らないどころか日々まとまりが強くなってくる。それがフェアーウエルパーティで表れた。

参加国をアルファベット順に読み上げ、代表選手に韓国風イッキ飲みをさせる。ビールの入ったグラスにウイスキーのグラスを入れ（ウイスキーがシングル入っている)、飲み干した合図にチンチンと振るのだ。オーストラリア、カナダと順に進んでいく。どの国からも、国名を呼ばれると誰かが躊躇なくマイクのところに登場し、挑戦する。もちろんイッキに飲めなかった人も多いが、それもまたご愛嬌で、会場を盛り上げる。ハンガリーなどいくつかの国は、女性が出てくる。日本は秋田大の深沢さん。Ｅ・ダニングも「若いときにはやったゾ」と言いながらＵＫ代表で登場し、見事に杯をあけた。

一次会の後、大会副委員長ソウル大学林先生主催の二次会に移動し、梨花大近くのビアホールに80人が歌い、踊り、ソウル学会の最後の夜を締めくくった。

エリック・ダニング講演

「世界的問題としてのフットボール・フーリガニズム」

海老島均（Ｋインターナショナル・スクール）

７月25日にエリック・ダニング教授による表記の題名の講演が六本木の国際文化会館で開かれた。

学術関係者、マスコミ関係者、サッカー関係者、国籍的にも本当にさまざまな人が会場を埋め尽くし、講演後は多くの熱心な質問が続き、とても盛況のうちに会は終了した。以下講演の要旨をまとめてみた。

2002年の大会を前にして、ここ東京でフットボール・フーリガニズム(以下ＦＨと表記：ここで言うＦＨはあらゆる行動を含む－言葉による攻撃、卑猥な歌、武器の使用不使用にかかわらず実際の暴力)について語れるのは本当にタイムリーである。実際、多くの人がＦＨについて心配しているであろう。

ＦＨはメディアや政治家に関わってきた問題であり、社会学者や社会科学研究者の領域ではなかった。しかし適切な社会学的分析や説明はフーリガニズムに対処したり未然に防いだりする前提条件となりうる。

1985年にブリュッセルで起きた悲劇（ヨーロピアンカップの決勝、ユベントス対リバプールの試合で39人のイタリア人が亡くなった）を受けて当時のサッチャー首相は、「問題は簡単である。悪人どもがＦＨを引き起こしているのであり、彼らを捕まえればよいのである」と言った。しかし実際にはそんな単純な話ではない。
ＦＨを的確に表現している３つのジョークがある。

ジョークその１：イギリス人の４歳の子供が、テレビで南アフリカのアパルトヘイト時代の暴動シーンを見ていた。すると「お父さん早く来て。フットボールやっているよ。」
ポイント：フットボールと乱闘はセットのように扱われていた。70年代80年代、警察はこれに過剰反応し、事態をより悪くした。

ジョークその２：チェルシーのサポーター(ヘッドハンターと呼ばれる悪名高きメンバー)がレスターとの試合に備えて、バスで移動していた。サポーターの一人が窓からレスターのサポーターを見つけて「緊急事態だ。バスを止めてくれ」と言った。彼はバスから降りて、そのレスターのファンをコテンパンに叩きのめし、ほっとしたような顔をしてバスに帰ってきた。ドライバーは「他に緊急の用事のある人いますか？」と皆に聞いた。

ポイント：人々はとにかくスポーツのように暴力を楽しんでいる。これがこの現象の一つの特徴である。

ジョークその３：やはりチェルシーのサポーターについてである。サポーターの一人が、タブロイド紙「サン」がレスターでの暴動を報じた記事を読んで、「あの暴動を計画するのに６週間もかかったのに、サンは『考えなし(mindless)』の暴力と言っている」と嘆いた。
ポイント：一般的な道徳的価値観からすると彼らの行動は理解しがたい。しかし彼らの心の内面に入り込み、彼らの動機を探ることが必要である。

ＦＨには４つの神話がある。その反論も列挙。
1）ＦＨはごく最近の問題である。
—19世紀より事例がある。
2）ＦＨはイギリスおよびヨーロッパに限定された問題である。
—アルゼンチン等の南米で、より凶悪な事例が存在する。
3）ＦＨはサッカーだけの問題であり、アメリカではサッカーに限らず他のスポーツでも発生例が少ない。
—ラグビー(フランスで)やボクシング等でも報告例はある。つまりカタルシス理論(暴力的でないスポーツ－サッカー－については起こりやすい)というのは間違いである。確かにアメリカにおいていかなるスポーツにおいて観客の暴動はまれであるが、優勝を祝した形で羽目をはずす犯罪行為は存在する。
4）問題は解決しつつある。イングランドにおいては90年代ほとんどなくなりつつある。
—国内では確かに下火になったかも知れないが、国外で問題を起こすイギリス人が後をたたない。

メディアや政治家が良く用いる説明。その反論も列挙
1）アルコールの過剰摂取によって起きる。
—アイルランドやデンマーク(アルコールの摂取量の多い国民)でＦＨが起きていないので正しいとはいえない。イングランドの常習のフーリガンは常に頭をクリアにしているために飲まない。
2）不公正や無能なレフリーが原因で生じたフィールド上の乱闘等に触発される。
—暴力は時として試合と関係なく発生する(試合前にも)。
3）失業によって誘発される（left wingによる説明)。
—1930年代、失業率は高かったが、ＦＨは稀であった。1960年代、失業率は低かったがＦＨは頻繁に起きた。
4）甘え（寛容な社会）により引き起こされる（political rightによる説明）

—フーリガンたちはおしゃれな服装をし、かつてのスキンヘッド時代の労働階級の服装とは違い裕福そうな若者に見える。しかし実際は盗んだものや安い服に偽のロゴを縫いつけブランド品を装うなど、外見だけで判断できないところがある。

社会学的説明
1）調査したフーリガンの80%が労働者階級に属する。
—マスキュリニティが理想とされる社会階級に属している。
2）感情的喚起
—インタビュー調査をした多くのフーリガンたちは口々に戦いのスリルを口にしている。１とも関連してくるが、戦うことが社会的地位と連関してくる階級文化に生活している人々なので、ロール・モデルも自ずとそうなってくる。

結　論

多くのＦＨの問題はユニバーサルで、世界中において展開されているものなのである。比較的非軍事的社会における男性優位性、家父長主義の発露を見出そうとする人たちのはけ口であるということが言える。また争いはさまざまな要素により図式化できうる。たとえばイングランドでは階級的対立や地域的不平等であり、スコットランドや北アイルランドでは宗教的対立であり、ドイツでは西と東の地域的対立や世代的対立であり、スペインでは国内において言語の違いからくるナショナリズム(バスクなど)など問題は複雑である。

また国の規模、そしてそれによる国民の凝集性も関係してくる。デンマークやアイルランド共和国は小さい国で国民の凝集性が高い国で知られ、よってＦＨの事例がほとんどない。

2002年のワールド・カップにおいては、インテリジェンスをもった警備行動や一般的対処方法によって、問題を最小限に抑えることができることを信じている。イングランドが予選を突破しフーリガンが日本や韓国に上陸してくるかもしれない。しかし彼らは少数派であるという認識を持っていただきたい。

研究委員会からのお知らせ

研究委員会　杉本厚夫（委員長）、川西正志
黒田　勇、　　松田恵示

〈プロジェクト研究員の募集について〉

本学会も10年の歳月を経て、会員各位のご努力のお陰で、多くの研究成果を蓄積することができました。そして、ある程度の研究の在り方についての共通理解も得ることができるようになってまいりました。またそれと同時に、研究の課題も見えてきているように思います。それは、スポーツ社会学の対象としてのスポーツが依拠するその身体性と、スポーツが持つ現代における社会的意味といったことに収斂されるのではないかと考えております。

そこで、研究委員会では、平成13・14年度にわたる２年間のテーマ別研究プロジェクトを、２つ立ち上げます。平成13年度は、それぞれの研究テーマについて中間報告を、学会大会（福岡大会）でテーマ・セッションとして行い、平成14年度は、最終報告をその年度の学会大会で行って頂きます。そして、報告は最終年度の紀要に掲載する予定でおります（現在編集委員会で検討中）。

２つのテーマ別研究プロジェクト内容については、次ページのようになっております。また、それぞれのテーマについては、研究委員会担当の理事がお世話させて頂きます。

これらのプロジェクトへ研究員として参画をご希望の方は、次の要領で申し込んで下さい。申請書類を検討の上、決定させて頂きます。

とりわけ、若い研究者の方々の積極的な参画をお待ちしております。

記

次の事柄を記載し、12月５日までに、杉本（sugimoto@kyokyo-u.ac.jp）へ、E-mailで応募下さい。もし、添付ファイルで送られる方は、Wordでお願いいたします。

【記載事項】

1　氏名、所属、住所、年齢、電話番号、E-mailアドレスをお書きください。
2　過去５年間の研究業績を列挙してください。
3　どちらのプロジェクト参画するかをお書きください。
4　そのプロジェクトに参画して、研究してみたい自分のテーマとその内容について、1000字以内で記述してください。

以上

2002年日韓サッカーワールドカップとメディア

黒田　勇

現代のスポーツイベントはメディアを抜きにしては考えられない。とりわけ2002年に日韓で共催されるワールドカップは、いわば世界最大のメディア・イベントでもある。ただし、20世紀のワールドカップが想定してきたワールドとネーションは今大きく変わりつつある。グローバル化、商業主義、ナショナリズム、アイデンティティ、放映権、選手の権利などなど、スポーツ、国家、プレーヤー、スポーツファンとメディアをめぐるテーマが集約されたこのワールドカップというイベントは、スポーツ社会学にとっても絶好の研究機会である。

近年、メディアとスポーツを巡っての研究が海外では蓄積されてきたが、日本におけるスポーツ社会学の分野においては、まだ個別テーマでの成果が散見される段階である。この機会をとらえて、メディアとスポーツの関わりに関する諸問題に、さまざまな研究視点から多角的に取り組みたい。

スポーツする身体の社会学

松田恵示

「身体」という研究テーマは、理論、実証を問わずスポーツ社会学の基底に流れる重要な問題の１つである。しかし、スポーツ社会学という知の営みは、このテーマに対してどれほどのオリジナリティを発揮しうるのだろうか。あるいは、単なる「身体論」や「スポーツ論」にとどまらない「スポーツする身体」を社会学的に捉えようとする研究は、どのような問いの射程と方法を持たなければならないのだろうか。

例えば、「スポーツする身体」であるからこそ、哲学や教育学といった人文科学的身体のみならず、政治学や経済学といった社会科学的身体や、生物学や運動学、生理学、医学、さらにはロボット工学といった自然科学的身体までが、同時に視野におさめられる可能性に拓かれている。つまり、既存の学問体系から自由に「身体」を捉える条件に満たされているのである。しかし、こうしたメリットを、どのような形でどのように取り上げていくのかについては、いまだ藪の中にあると言わざるをえない。

そこで本プロジェクトでは、学会全体の研究構想力が高まることをも願いつつ、「スポーツする身体の社会学」が持つ可能性とその条件を、研究の対象と方法の両面から、幅広くしかしながらシャープに検討することをねらいとしてみたい。萌芽的な課題研究として、挑戦的な取り組みができればと考えている。

編集委員会からの報告事項と審議内容

＊**報告事項**―主に「スポーツ社会学研究」第10号編集の進捗状況は、以下の通り。

1）メンバー構成―理事以外の編集委員

（理事）伊藤公雄（委員長）、荒井貞光、池井　望、菊　幸一、清水　諭

（理事以外の追加メンバー）原田　達（桃山学院大）河原和枝（京都橘女子大）
澤田和明（滋賀大）

（事務補助）西村久美子（大阪大学院生）

2）審査上の留意事項

編集委員所属の院生の投稿について、審査はもちろんのこと編集会議上での発言もいっさい行わない。

3）編集スケジュール及び進捗状況

5月12日　第1回編集委員会
追加委員、10号編集方針・構成、審査上の留意事項等の決定
依頼論文2編、10号記念座談会の企画

8月24日　原稿締め切り

8月30日　第2回編集委員会
査読者決定・査読依頼、規約改正（投稿規定）等の決定

9月21日　査読の結果報告締め切り　13編の原著論文応募

9月29日　第3回編集委員会執筆者への査読結果連絡、必要があれば、修正依頼など
書評依頼6編

（今後の予定）

11月6日　修正された原稿締め切り日／必要があれば、査読者への再度の査読依頼

12月4日　二度目の査読の結果報告締め切り日

12月8日　第4回編集委員会　必要があれば、コメントをつけた上で執筆者に最終原稿の執筆依頼

1月上旬　原稿の最終締め切り（フロッピー入稿）／印刷屋さんに依頼
校正（1回のみ）

2月末から3月初旬　最終の印刷開始

3月末　学会大会で配布

＊**議題と審議の結果**

1）「編集規定」の追加・改正について

「4．本誌の掲載原稿は、投稿と依頼から成ります」に以下の一文を追加することに決定した。

「なお、投稿することができるのは、編集前年度の3月末日以前に入会を認められた本学会会員とします」

改定の趣旨は、年1回発行の研究誌への投稿のみを目的とした会員の登録を防ぐことにある。なお、規定の改定は、総会での承認を必要とするので、本案は来年3月の総会に付議されることになった。

2）研究誌の販路拡大の方法について

現在700部印刷されている研究誌は、会員数を除く残余部数の販売が課題となっている。法政大学出版局からの広告が望めないので、学会として読者層が重なっていると思われる「現代スポーツ評論」（創文企画）に広告をうつことになった。なお、会員所属大学の図書館への校費搬入状況も併せて調査することになった。

3）「専門委員」の扱いについて

研究誌に記載される「専門委員」について、審査を引き受けた会員の名前であることが当の審査員に伝わっておらず、誤解を招く事例がみられた。この「専門委員」という名称の扱いについて審議した結果、今後ともこの名称は継続して用い、編集委員会の方から審査を依頼する会員に対して、審査依頼あるいは最終審査報告の折に「専門委員」として就任の確認あるいは内諾をとることとなった。

4）その他

・書評について、追加の依頼を理事から受け付けることになった。最終的な諾否の判断は編集委員会が行う。

・昨年度編集委員会による「継続」審査の扱いの内容について、確認することとした。

国際交流委員会からのお知らせ

野川春男（順天堂大学）中島信博（東北大学）平井　肇（滋賀大学）

1　学会レベルの国際交流について

本稿では、先日の理事会（10月６日）で討議された学会レベルの国際交流を正規の協定書に基づいて実施することの是々非々について、会員の皆さんのご意見を聴いてみたいと考えた次第である。これは、韓国スポーツ社会学学会から正式な国際交流の要請が届いたからである。

９月26日に開催された日本体育学会本部企画「第５回ＦＩＦＡワールドカップシンポジウム」には、予想を上回る約350人の聴衆が参集した。メインテーマである「2002FIFAワールドカップ開催が若者のスポーツ文化へ及ぼすインパクト」について日韓２名づつの研究者が、社会科学的側面と自然科学的側面から発表を行った。スポーツ社会学分野からは鹿屋体育大学の川西正志会員がシンポジストとして登壇した。このシンポジウムを企画運営したメンバーの一員として、聴衆の集まり具合とシンポジウムの進行状況が予想以上によかったことに正直、安堵感があった。

さて、今回のシンポジウムは日本体育学会と韓国体育学会との国際交流の一環として行われたことをご存知の方はどのくらいいるのであろうか？日本体育学会と韓国体育学会、日本体育学会と中国体育科学学会との２国間の国際交流を正規の協定書に基づいて1998年から行われている。協定書では、相手国に隔年で学会を代表する会員を２名づつ派遣するシステムである。原則として相手国までの旅費（航空費）は当該学会が負担し、滞在費と国内交通費はホスト国が負担である。「学会を代表する会員」とは学会の役員を指すのではなく、ホスト国の要請や指名に応じた人選もあれば、当該年の国際交流のテーマによって会員の中からの人選（自薦・他薦を含む）もある。2001年は、中国と韓国から代表者が来日する年に当っていた事から、体育学会国際交流委員会（委員長：平野祐一）ではワールドカップや世界的イベントに関した研究者の派遣を中国体育科学学会に要請したが、他の分野の代表者が人選されてきた。国際交流委員会では、「国際交流では何をすべきか」「人選はどうすべきか」「今後のどのような見直しをすべきか」等について討議を重ねている。

日本体育学会の実情を紹介したが、冒頭の件に戻って本学会の国際交流の方向性を考えてみたい。学会レベルでは、日本体育学会が実施しているような国際交流はあまり例がない。特定の国あるいは団体と正規の協定書を取り交わして定期的な交流を図るメリットとデメリット、交流プログラムの内容、財源の確保、人選の方法、中期的な計画立案など、ざっと挙げただけでも簡単にはいかない点も多々ある。これまでのように海外で開催される、あるいは開催された学会の情報伝達と学会大会での招待者（主に欧米と中韓）に対する作業だけで国際交流を良しとするのか。このあたりを学会員の方々のご意見を頂戴いたしたいものである。ご意見・アイディアを小生のメール(nogawa@sakura.juntendo.ac.jp)に送付していただければ幸甚です。

（野川春夫）

2　「第６回　国際体育・スポーツ史学会　金沢セミナー」のお知らせ

国際体育・スポーツ史学会（International Society for the History of Physical Education and Sport：ISHPES）主催の国際セミナーが、2002年７月９日より12日にかけて、石川県金沢市で開催されます。

セミナーのテーマは、「スポーツ史におけるローカル・アイデンティティ」となっています。大会事務局は金沢大学教育学部(大久保英哲さん)で、ホームペイジはhttp://www.ed.kanazawa-u.ac.jp/~ishpes/です。発表申し込み期限は、2002年２月１日となっています。

（平井　肇）

第Ⅵ期　第二回理事会報告

日　　時：2001年10月６日　新町会館（京都）
出 席 者：平野（会長）、松村（理事長）
　　編集委員会：池井、菊
　　研究委員会：杉本（委員長）、川西、黒田、松田
　　国際交流委員会：野川、中島、平井（会報幹事兼任）
　　ホームページ委員会：杉本（研究委員会兼任）
　　事務局：山下、平井
　　次期学会大会事務局：西村

各委員会報告・審議事項

1　編集委員会（「編集委員会からの報告事項と審議事項」参照）
・編集進捗状況および審査上の留意事項についての確認（報告事項）
・「編集規定」の追加・改正（審議事項）
・「スポーツ社会学研究」販路拡大の方法について（審議事項）
・「専門委員」の扱いについて（審議事項）
・その他

2　研究委員会
・プロジェクト研究企画について（審議事項：「研究委員会からのお知らせ参照」）
研究委員会より、本会の今後の研究のいっそうの促進のため、平成１３．14年度にまたがり二つの研究プロジェクトを立ち上げたい旨提起があり、参加の方法等種々議論のうえ了承。これに伴う経費は、通常の研究委員会経費以外に本年度は予備費より10万円充当することとなった。次年度以降は新たに予算項目として立ち上げる旨了承。
・第12回学会大会開催校として、かねてより交渉中の岡山大学が快諾していただけることになった旨報告。正式に開催主管の任を引き受けてもらうこととなった。
・第11回大会進捗状況につき九州大学事務局西村氏より、スケジュール・内容等報告、了承。

3　渉外（国際交流委員会）
・国際スポーツ社会学会、第一回世界会議ソウル大会報告（「特集：1st Congress of Sociology of Sport」を参照）
・2002年開催、国際体育・スポーツ史学会金沢大会について紹介。会報にて紹介する旨報告。
・日韓スポーツ社会学会学術交流協定について（審議事項）
韓国スポーツ社会学会より日本スポーツ社会学会と公式に学術交流協定を締結したいとの申し入れがある旨報告。種々議論の上、経費を伴う事項でもあり、その精神を生かしつつも具体的あり方については継続的に検討することとなった。

4　ＨＰ委員会
・国際スポーツ社会学会のリンクが完了した旨報告。

5　事　務　局
・会報第29号発刊状況報告
・国際スポーツ社会学会各国調査の報告。現時点で日本スポーツ社会学会は会員数において世界有数の規模である旨報告。
・会費納入状況について報告
・新入会員および会員移動について報告、承認、なお今後新入会員の公示は理事会承認後の会報にて行う旨了解。
・入会に際しての会員推薦について（審議事項）
入会の際、推薦会員には学生会員も含まれるか否かについて審議
種々議論の上、「正会員に限る」とする旨理事会方針とし、規約改正を伴うことなので総会にてあらためて提起することとなった。
・監事、幹事の委嘱（審議事項）
監事として宮内考知（早稲田大学）、および天野郡寿（神戸大学）両氏に、また幹事として事務局強化の観点より川口晋一（立命館大学）、および坂なつこ（立命館大学）両氏に委嘱することとなった。
・その他
この間の会員移動が著しいので、新たに名簿作成の必要性ある旨指摘があり、次年度新しい名簿発刊を行うこととなった。

会　員　動　向

住所・所属変更等

氏　名	住所・E-mail	Tel/Fax	所　　属
小林　　勉			信州大学教育学部 スポーツ科学教育講座
中島　信康			東北大学大学院 教育学研究科
村田　雅之			東京工芸大学 メディアアート表現学科
前田　和司			北海道教育大学旭川校

新入会員・退会者動向

氏　名	住所・E-mail	種別・Tel/Fax	所　　属
宮本（みやもと）　晋一（しんいち）		正会員	愛媛女子短期大学
飯田（いいだ）　貴子（たかこ）			帝塚山学院大学
金（きむ）　圭鐘（きゅじょん）			明治学院大学大学院
小笠原博毅（おがさわらひろき）			Goldsmiths College Univ.of London Dep.of Sociology. Goldsmiths College Univ. of London
有元（ありもと）　健（けん）			Goldsmiths College Univ.of London Dep.of Sociology. Goldsmiths College Univ. of London

氏　名	住所・E-mail	種別・Tel/Fax	所　　属
大勝志津穂（おおかつしづほ）			中京大学大学院
杉座　秀親（すぎざ　ひでちか）			尚絅女学院短大
福本　直子（ふくもと　なおこ）			神戸大学大学院
増島　大樹（ますじま　だいき）			立命館大学大学院
寺田　英治（てらだ　えいじ）			流通経済研究所

氏　名	住所・E-mail	種別・Tel/Fax	所　　属
中尾勇一郎（なかおゆういちろう）			㈱アルペン
溝口　紀子（みぞぐち　のりこ）			静岡県立大学短期大学部

退　会　者

谷口　雅子　　市川　　哲　　川辺　　光

住所不明者

太田　義孝　　小久保伸幸　　横井　康博　　早川みどり　　若林　弘紀　　岩崎　　司
遠藤　竜馬　　鈴木　知己

（お心当たりある方は事務局までご連絡ください）

上記を含め、2001年度10月５日現在会員数　386名

編　集　後　記

最近、定期購読している雑誌が読まれることなく、私の机の上に山積みになっています。なぜか、考えてみました。

その１　いろんなことに手を拡げすぎ、またいろんな仕事を押しつけられ、とにかくバタバタしている。その２　少しでも暇ができると、インターネットでサーフィンしている。昔は、ソファに寝転がって雑誌を読んでいたのに。その３　最近、電車に乗らないで、車で移動することが多い。今思えば、通学・通勤は、貴重な読書の時間でした。

一見無駄に思えることが、貴重な財産になる。人間には、Re-creation活動が大事なのですね。「いろんなことに流されやすい、安請け合いをする、能力のない自分に気づいていない」等々、結局は自分のせいなのですが。

来年は、雑誌が読める余裕を取り戻したいです。「バタバタではなく、ダラダラで」生きることを目指してガンバリます。否、このガンバリ精神を表明するところに、そもそも問題があるのかも。

(HiJimmy)

日本スポーツ社会学会会報　第30号　2001年11月24日発行

日本スポーツ社会学会事務局（立命館大学・産業社会学部内）

◎学会への連絡、入退会、住所・所属変更、会費納入、その他の各種手続き

〒603-8577
京都市北区等持院北町56-1
立命館大学・産業社会学部内
日本スポーツ社会学会事務局　山下高行（理事・事務局長）、川口晋一

◎会報への投稿等

〒520-0862
滋賀県大津市平津２-５-１
滋賀大学・教育学部
平井　肇（理事・会報担当）

◎学会のホームページ

日本スポーツ社会学会ホームページ
http://sport.kyokyo-u.ac.jp/jsss/jssshp.htm
web master：杉本厚夫（理事・ＨＰ委員長）

入会申し込み書

（※事務局へご返送願います）

ふりがな 氏名：	会員種別（どちらかを○で囲む） 正会員　・　学生会員
紹介者： （推薦人） ※必ず記入してください	専門分野：
勤務（所属）先：	
勤務（所属）先住所： 〒 TEL：　　FAX：	
自宅住所： 〒 TEL：　　FAX： ※任意です	
郵便物の発送先（どちらかを○で囲む） 勤務(所属)先　・　自宅	
E-mail： ※任意です	

21世紀スポーツのキーワード　講座　現代文化としてのスポーツII

スポーツ／メディア／ジェンダー

鈴木守・山本理人 編著　A5版248頁　本体2600円

高度化と大衆化の二つのベクトルを持ちつつ日々成長しつづける現代スポーツ。本書でとらえた「メディア」と「ジェンダー」という視点は，21世紀のスポーツ文化を読み解く上でのキーワードとして，ますますその重要度を増していくものと考えられる。
スポーツの持つメディア性，身体運動の文化と社会的／文化的性差との関わり等々について，多様な切り口から分析する。

〔主要目次〕

I　スポーツ／メディア

1 テレビメディアの特性とスポーツ文化　＊2 テレビ放送とスポーツの商業化　＊3 スポーツとジャーナリズム　＊4 スポーツヒーロー論　＊5 スポーツイベントのメディア力
＊6 英国スポーツ文化論　＊7 イギリス人とフットボール　＊8 近代文学とスポーツ

II　ジェンダースポーツ

9 ジェンダーと社会＊10 ジェンダーと“こころ”　＊11 青年期のジェンダー
＊12 ファッションとジェンダー　＊13 文学の中のスポーツとジェンダー
＊14 近代スポーツとジェンダー　＊15 マスメディア・ジェンダー・スポーツ

メディアとスポーツ，生涯スポーツ，スポーツ産業など，現代スポーツの諸相を探る

スポーツ文化の現在（いま）

講座 現代文化としてのスポーツ　／鈴木守・山本理人編著／A5版266頁　本体2600円

豊富な図表資料，保健体育テキストに最適

大学生の健康・スポーツ科学

大学生の健康・スポーツ科学研究会　編　B5版216頁　本体2400円

心身ともに健康で，生き生きとした日々を送るにはどうしたらよいか？
現代社会における運動・健康・スポーツの意味について，各分野の専門家が概説する。

日本柔道の原点を見つめ，将来の発展に立ち向かう

柔道の視点——21世紀へ向けて

竹内　善徳　編著／柔道指導者研究会　編　A5判244頁　本体2800円

I　歴史と文化／II　教育と指導／III　競技と強化／IV　強化と科学の各章を，研究・指導の最前線にある専門家が担当，新たな概説書が誕生した。柔道人の必読の書！

〒171-0042　東京都豊島区高松 2-8-6　道和書院　TEL(03)3955-5175　FAX(03)3955-5102

A・ホール　飯田貴子・吉川康夫監訳

フェミニズム・スポーツ・身体

スポーツのジェンダーポリティクス――体育教師・学生やスポーツをしている女性たちに向けて、スポーツとジェンダーを巡る言説を読み解く

二六〇〇円

井上　俊

スポーツと芸術の社会学

「芸術」型文化としてのスポーツを追う――スポーツ・武道・芸術・物語をつなぐユニークな視点に立つ、文化社会学の可能性を探る試み

一九〇〇円

松田恵示

交叉する身体と遊び

●あいまいさの文化社会学　身体と遊びがまじりあうポップな日常を、あいまいさのなかのバランスというユニークな視点で読み解いた労作

二二〇〇円

杉本厚夫編

体育教育を学ぶ人のために

わが国の近代化の過程で生まれた体育教育は、近代的身体とエトスの形成にその力を注いできた――体育教育の歩みとこれからを考える

二三〇〇円

井上　俊・亀山佳明編

スポーツ文化を学ぶ人のために

文化として、様々な形で人々と深くかかわるスポーツ。その関係を読み解く視点をわかりやすく提示し、スポーツ文化研究の基礎を築く文献

二三〇〇円

平井　肇編　1900円

スポーツで読むアジア

グローバル化、ネーションとエスニシティ、都市化など、アジア・スポーツに多面的に接近する。アジアスポーツ比較社会学事始めの一冊

井上　俊編　2000円

新版 現代文化を学ぶ人のために

映画、音楽、文学、ジャーナリズム、旅行、恋愛、ファッション、スポーツなど、多様な側面から時代のドラマを照らし出す「現代文化論」

J・リーヴァー　亀山佳明・西山けい子訳　2233円

サッカー狂の社会学

ブラジルの社会とスポーツ

W杯を四度制覇したブラジル・サッカーの強さの秘密を社会学の視点から考察した貴重な一冊

日本スポーツ社会学会編　2500円

変容する現代社会とスポーツ

グローバリゼーションの潮流の中で世界の研究者が京都会議で熱く語ったスポーツの行方とは――

世界思想社　京都市左京区岩倉南桑原町56　☎075(721)6506
http://www.sekaishisosha.co.jp〈消費税別〉